

研究活動

山 脇 雅 夫

著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行又は 発表の 年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
(著書)						
(学術論文)						
1. ヘーゲル『精神の現象学』における概念的自己の生成と展開	単著	1990.	京都大学修士論文	ヘーゲルが哲学の原理とした「概念」の立場が『精神の現象学』においてどのように生成してくるかを論じた。ヘーゲルは彼のいう「精神」の構造を「我々である我、我である我々」という形で定式化する。ここには、対話において典型的に示される、他を介した自己知が表現されている。近代市民社会において実現された個人と個人との相互依存的システムが土台となり、それを思想的に把握す		
2. 反省と判断——ヘーゲル『大論理学』についての一 試論	単著	1992. 9	『哲学論叢』 19 京都大学哲学論叢 行会編	ヘーゲルが『論理の学』「本質論」のなかで考察している「反省」が、同じく『論理の学』「概念論」における「判断」の中でも働いていることを手がかりに、反省を特徴づける否定概念を分析した。ヘーゲル論理学において「この花はバラである」といった判断は個別的存在と普遍的存在とが結合した事物の構造を示すものであり、「反省」はこの結合において働く否定的関係付けの論理に他な		25-36頁
3. ヘーゲル論理学における科学的知識の成立——神の存在論的証明の	単著	1994. 7	『アルケー』 2 関西哲学会年報	ヘーゲルが『論理の学』「概念論」で、「神の存在論的証明」の論理構造を解明したとしている箇所を分析した。そこで「形式」という概念と「内容」という概念が重要な役割を演じることに注目し、『論理の学』でのそれらに対する定義をもとに、ここで問題になっていることが、学的知識にそなわる必然性からその実在性を導くものであることを解明した。それが自然学的知識の基礎付けと		126-136頁
4. 仮象と反省——ヘーゲルの矛盾概念の理解のために	単著	1995. 3	『近世哲学研究』 1号 京大・西洋 近世哲学史懇話会	『論理の学』「本質論」冒頭箇所を注釈した。反省が普遍と個別との間の運動を示すものであることを中心に、普遍的本質の不在を示すものである「仮象」もまた、まさにこの不在ということによって本質との関係を示すものであること、また、反省の運動から存在を導くヘーゲルの意図が、普遍と個別との関係が存在論的一次性を有するものであることを主張するものであることを指摘した。		68-89頁
5. 学の論理——ヘーゲル『論理の学』研究序	単著	1995. 6	『密教文化』191 密教研究会編	「存在論」、「本質論」、「概念論」という『論理の学』の体系構成がもつ学問論的意味を考察した。		109-127頁

6. 存在と学——ヘーゲル『論理の学』研究序	単著	1996. 3	京都大学博士論文	<p>た。『論理の学』第一巻「存在論」は基本的に直接的存在を表現する思惟規定を叙述し、第二巻「本質論」は存在を解して認識される内的な本質を対象とするが、両者の統一としての「概念論」は、学的知の構造を、直接的データと普遍的記述の総合として示すものであることを解明した。</p> <p>ヘーゲルが『論理の学』の中で示した独自の存在概念を第二巻「本質論」を中心に考察した。直接的存在は、生々流転を繰り返す捉えどころのないものであり、他方、現象への適用を欠いた普遍的記述は空理空論に留まる恐れがある。両者が統一的に把握されて初めて、実在性を持った学知となるのであり、そうした学知に捉えられるものこそが存在である。「本質論」は学知の生成の過程を叙述し</p>		
7. 有限な事物の本性としての矛盾——ヘーゲル『論理の学』 「反省規定」	単著	1996. 8	『ヘーゲル論理学研究』2号 ヘーゲル〈論理研究会編	<p>『論理の学』第二巻「本質論」の「反省規定論」を注釈した。ヘーゲルは、「この花はバラである」といった判断が実在の構造を示すものであるとし、主語を述語に包摂する思惟の働きを反省と呼んだ。「同一性」、「区別」、「矛盾」といった反省規定は、そうした反省の働き方を示すものであり、判断の主語となる個別的存在者が、同一であり、他から区別され、矛盾するものとして反省され</p>	33-58頁	
8. ヘーゲルとヴェーバー —— 近代の運命を	単著	1997. 12	『理想』660号 理想社	<p>ヘーゲルとヴェーバーが、ともに近代文化という問題と対峙していたことを明らかにした。ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と、ヘーゲルの『精神の現象学』を中心に、両者の近代文化に対する認識が多くの共通点を持つことを確認した。しかしヴェーバーが近代の分裂を運命として引き受けるのに対し、ヘーゲルは発話・聞き取りの運動の中に、分裂の中での共同</p>	72-82頁	
9. ヘーゲルにおける存在と無との同一性のテーゼ	単著	1998. 8	『密教と諸文化の流』 永田文昌堂 著作者名は多数につき省略	<p>『論理の学』第一巻「存在論」冒頭の存在と無の同一性のテーゼを分析した。『論理の学』冒頭の「存在」は第二巻「本質論」冒頭の「反省」の一局面を、「反省」は第三巻「概念論」の「判断」の一局面を叙述したものである。判断のコブラは主語と述語を区別しつつ関係付けており、否定と肯定とがともに含まれる。存在と無の同一性は、こうしたコブラの示す関係主義的存在性を表現している</p>	185-200頁	
10. 近代の存在論——ヘーゲルの現実性概念	単著	1998. 10	『哲学研究』566 京都哲学会編	<p>『論理の学』第二巻「本質論」の「現実性」という章で扱われた存在の構造を考察した。「現実性」の章は、その最後のカテゴリーである「相互作用」において、自覚</p>	89-127頁	

				める「相互作用」において、目立した実体同士の間相互承認的存在構造を描き出している。ここでは、近代の分裂文化の中において、分裂を単に絶対的同一に回収してしまうのではなく、分裂を分裂のままに生きることを基礎付ける存在論が構想されていることを	
11. ヘーゲルの根拠論——知と存在との相即	単著	1999. 1	『近世哲学研究』6号 京大・西洋近世哲学史懇話会編	『論理の学』第二巻「本質論」の「根拠」の章の分析した。根拠づけという知の働きは、根拠と根拠づけられるものとを区別・関係させることで事柄を把握するが、落体の法則のような普遍的な法則をを石の落下のような個々の事象に関係付けるためには、初期速度や石の高さといったさまざまな個別的条件があげられる必要があり、普遍的根拠の根拠付けの働きは、個別的条件に支えられている	28-48頁
12. 「促し」とはどういう行為か？——初期フィヒテの間主観性の理論	単著	2000. 1	『フィヒテ研究』8号 日本フィヒテ協会	初期フィヒテの間主観性の理論の中核をなす概念である。「促し」を、『自然法論』ならびに『新方法による知識学』を中心に分析した。そこでフィヒテは、問いを受けた者が必然的に答えざるを得ないように（答えないこと自体が一つの答え）、促しを受けた者は必然的に自発的行為をせざるを得ないことを語る。促しを受けること自体が能動的なものであり、そこでは能動と受動が統一されている	98-115頁
13. 知の自己吟味——『精神の現象学』緒論における知と即自の区別について	単著	2001. 3	『近世哲学研究』7号 京大・西洋近世哲学史懇話会編	『精神の現象学』「緒論」に登場する「知」と「即自」の区別を考察した。「意識は或るものに関係すると同時に、この或るものを自分から区別する」という事態において、関係の側面が「知」と呼ばれ、区別の側面が「即自」と呼ばれる。この論文では、この事態が指しているのは、意識が自分の主観的な意識内容が客観的にも妥当していると主張するという事態であることを解明した。	71-88頁
14. 歩く人——遍路の哲学への序説	単著	2004. 3	『遍路学』 高野山大学刊行	四国遍路について、哲学的考察を試みた。ハイデガーの技術論を手がかりに現代の技術文明の特質を考察し、その中で失われつつある根源的な自然や存在そのものとのつながりを、遍路がどのようにして回復するかを論じた。「我」意識が肥大化した現代人は、ひたすらに歩くという身体的行為によって我を無とし、そうすることで、世界を受け入れ、また世界に受け	263-267頁
15. 聖なるものの言語化——ハーバーマスのデュルケム論——	単著	2005. 2	『高野山大学論叢』40巻	道徳の基礎が宗教から合意へと移行するとするハーバーマスの所説を、彼のデュルケム論を中心に検討した。その結果、ハーバーマスの言うようにデュルケムにおいてある種のコミュニケーション	25-47頁

<p>16. 対話としての吟味— —『精神の現象学』にお ける「外」の問題</p>	<p>単著</p>	<p>2006.9</p>	<p>『哲学論叢』33号 京都大学哲学論叢 行会編</p>	<p>いこのる個のコミュニケーション 論的転回が生じていることは認め られるものの、デュルケームが宗 教のうちに見出した生の高揚に代 わるものをハーバーマスは提示で きておらず、道徳の基礎である価 値はやはり聖性を帯びるのではな 『精神の現象学』「緒論」に登場 する「意識との関係の外」が何を 意味するのを考察した。まず研究 史を概観し、知の外にあって知を 基礎付けるパラダイムを指すとい う説、知によってテーマ化された ものの「地平」を成すという説な どを批判した。その上で、『現象 学』の方法である知の自己吟味の 持つ対話的構造に着目し、現象知 が行う真理主張が「他者」に向け られたものであり、「外」とはこ</p>	<p>1-13頁</p>
---	-----------	---------------	---------------------------------------	---	--------------

17. 教育哲学の基礎としてのフィヒテの像の理論	単著	2008. 3	『高野山大学論叢』 4 3 巻	教育哲学としてフィヒテの知識学を捕らえなおすための予備的考察をした。チューリヒ講義の最後を締めくくる『人間の尊厳』の中で、フィヒテは人類史的課題に参画することによる人格形成を語る。そこに教育哲学的モチーフを読み取り、像の理論をその基礎をなすものとして解釈しようとした。本論では、その前提として、知識学の原理の成立過程を跡付けた。	31-46頁
18. 啓示宗教と絶対知——『精神の現象学』における時間の問題	単著	2008. 1	『ヘーゲル哲学研究』 1 4 号 日本ヘーゲル学会編	『精神の現象学』 「絶対知」における「記憶・内化」の意味を探るべく、絶対知を直接に準備する段階である「啓示宗教」を分析し、それに基づいて「絶対知」の構造を考察した。啓示宗教は過ぎ去った神を記憶において内化・現在化する宗教である。同様に絶対知は『現象学』の道程において過ぎ去った知の諸形態を記憶において内化するところに成り立つ。本論は「絶対知」は『現象学』の全体	113-124頁
19. デューイ教育論における経験の意味	単著	2009. 2	『高野山大学論叢』 4 4 巻	デューイの相互作用概念に教育の抱えるジレンマを解消するヒントがあることを明らかにした。教育には、社会の文化的再生産という類的課題と、一人の人間の成長を援助するという実存的課題がある。この二つの課題は時に齟齬をきたす。だが、デューイは、相互作用を経験の根本とすることで、個人が自分の人生を全うすることと社会性が矛盾しないことを示した。そのことをデューイの教育哲学的著作を中心に考察した。	1-12頁
20. ヘーゲルの教育観——ルソーとの比較を中心	単著	2009. 2.	『高野山大学大学院紀要』 1 1 号	ヘーゲルもルソーも、特定の文化の形態や狭い社会の枠に限定されない普遍的主体へと自己を形成することを近代人の課題と見た。しかし、人間に内在する本源的自然の導きにおいてそうした主体を形成しようとしたルソーと異なり、ヘーゲルは歴史の総体が普遍的自己に到る道である。歴史を通して歴史を超越した知を獲得することが、ヘーゲル見た近代人の自己形成である。	1-4頁
21. 演劇的知識論の基礎付け——『精神の現象学』 「緒論」における知の構造	単著	2009. 1	『ヘーゲル哲学研究』 1 5 号 日本ヘーゲル学会編	『精神の現象学』の方法的特徴は、さまざまな知の立場がそれ自身の主張に沿った形で再構成されることにある。こうした方法は、近代認識論の根本前提である、主観・意識内容・客観の三項図式を打ち破るものである。「緒論」における知の規定は、この方法を基礎付けるものである。それは、虚偽の可能性を含んだものとしての自らの信念を客観的に主張するという、他者の観点を踏まえた知の	96-105頁
22. 人間の尊厳と苦——日本的尊厳の概念を求め	単著	2010. 6	下西忠他編『仏教と差別』 明石書店	人権の基礎を人間の尊厳に見定め、日本文化の伝統において、人	139-157頁

間の尊厳がどのような感情の対象となるのかを考察した。シラーにおいて尊厳は崇高の感情との連関において捉えられ、人間を圧倒する自然力に対して意志が示す抵抗において崇高さ感じられるのに対し、日本では、苦のような抗い難いものを受け入れていくところに崇高さが感じられてきたことを、正岡子規や谷川俊太郎の作品を題

23. 他在における絶対者—『精神の現象学』における実体=主体テーゼの	単著	2012. 1	『哲学論叢』39号 京都大学『哲学論叢』刊行会編	ヘーゲルは『精神の現象学』において、「真なるものと実体としてでなく、主体としても把握する」ことを主張している。本稿では、このテーゼ前半の「実体としてでなく」がシェリング的な絶対者の直接把握の拒否を主張するものであり、「主体として把握する」ことは、反省的知に対する現れた相で絶対者を把握することを主張するものであることを解明した。	13-26頁
24. ヘーゲルにおける知と超越—ドイツ観念論の新しい地図のために	単著	2013. 6	『アルケー』21号 関西哲学会年報	従来ヘーゲル哲学は知を絶対化した哲学として捉えられ、そこには知に対する超越は存在しないとされてきた。しかしヘーゲルは哲学知を、「絶対的他在における純粋な自己認識」と特徴づけており、この「他在における」という相にすでにして知に対する超越が組み込まれている。その意味で、知の外という問題圏を認めた後期フィヒテ・後期シェリングとヘーゲル	49-59頁
25. 他在における絶対者の臨在—「本質論」から「概念論」へ	単著	2014. 1	『ヘーゲル哲学研究』20号 日本ヘーゲル学会編	ヘーゲル『大論理学』の「本質論」から「概念論」への移行の構造を理解するためには、まず、「概念論」がどのような知を叙述するものなのかを明らかにする必要がある。「概念論」は世界という他在に臨在する絶対者を叙述するものであり、「本質論」は世界と絶対者の二元論を克服することで、それを準備している。本稿では、この克服が反省の自己否定において生じていることを明らかに	128 - 140頁
26. 判断と推理——ヘーゲルの媒辞の存在論	単著	2016. 7	『状況』2016年6・7号	媒辞の概念を中心にヘーゲルの推理論の特質を解明した。判断において主語と述語をへ都合するコプラは「空虚な存在」とされるのに対し、媒辞は媒介構造そのものを体現した存在であり、受肉した媒介である。判断が、当為を存在の彼岸に立てるカント・フィヒテ的二元論に対応するに對して、推理は、存在に内在化された当為を表現する論理であることを	161 - 177頁
27. ヘーゲルにおける現	単著	2017. 3	『近世哲学研究』20号 京大・西洋近世哲学会編	ヘーゲルは『法哲学』の序文において(理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である)と主張している。本論文では、この主張をpラフレイズしたと考えられる「十字架の上のバラ」という表現に着目し、『精神現象学』末尾の「絶対精神のゴルゴタの丘)とのつながりから、これが否定を介して生成する主体の構造を示す	41-54頁
28. 「概念」の実現として吟味——『精神の現象学』「緒論」における知の構造	単著	2019. 2	『高野山大学論叢』54巻	『精神の現象学』「緒論」における「知」の構造を解明した。『現象学』は知の自己吟味によって知を吟味するものである。これは、知が同時に知の知であり、この自己知において知自身が当初自覚していなかったものが明るみに出されることが自己吟味の内実であることを明らかにした。そうした隠れた連関の露呈こそが「概念の実現」であり、「現象知」というそれ自体真ならざる知を通して絶対	37-57頁

			者が顕現する様を叙述するものであることを指摘した。	
(その他)				
1. L. ジープ『ドイツ論における実践哲学』〈上妻精監訳〉	1995. 1	第3論文担当	翻訳	
2. 最近の論理学研究論文批評—ホーゲマン、ラマイル2論文について	1996. 7	『ヘーゲル哲学研究』2 ヘーゲル研究会編	論文評	111-118頁
3. 書評：久保陽一著『ヘーゲル論理学の基』(創文社)	2002. 8	『ヘーゲル論理学研究』8号 ヘーゲル〈論理学〉研究会編	書評	159-163頁
4. 文献紹介： Beiser, German Idealism	2011. 1	Prolegomena, 京都大学文学部研究科西洋近世哲学史研究会編	文献紹介	30-37頁
5. 書評：山口祐弘『ドイツ観念論の思索圏』	2011. 1	『ヘーゲル哲学研究』17号	合評会記録	178-181頁
6. ティルタイ『シュライアーマッハーの生涯 上』(茵田坦他監訳、法政大学出版会)	2014. 7	第4章、5章、6章担当	翻訳	
7. スクリプナー思想史大辞典(丸善出版)	2016. 1	項目「アナーキズム」「自然哲学」「ヘーゲル主義」担当	翻訳	
15. 『世界哲学史』7 (ちくま新書)	2020. 7	コラム「シェリングの積極哲学の新しさ」を執筆。		96-97頁
〈口頭発表〉				
1. 絶対知の間主観的構	1990. 1	現代哲学研究会 第57回研究会	『精神の現象学』における絶対知を「我々である我、我である我々」という構造から解釈した。	
2. ヘーゲル論理学と神在論的証明	1994. 1	関西哲学会 第46回研究大会	『大論理学』における「神の存在論的証明」を自然学的知識の成立という観点から解釈した。	
3. 促しとはどういう行か?	1999. 1	日本フィヒテ協会 第15回大会	初期フィヒテの「促し」を共同行為として解明した。	
4. 『精神の現象学』における無知の構造	2005. 1	日本ヘーゲル学会 第2回研究大会	『精神の現象学』の緒論における知の構造を解釈した。	
5. 自己中心性と神秘主義	2006. 10	宗教倫理学会 第7回学術大会	トゥーゲントハットの所論をもとに、宗教体験の構造を脱自己中心性として解釈した。	
6. 『精神現象学』における対話の意味	2008. 6	日本ヘーゲル学会 第7回研究大会	クロス討論パネラー	
7. 山口祐弘著『ドイツ観念論の思索圏』合評	2010. 1	日本ヘーゲル学会 第12回研究大	合評会特定質問者	

8. 『大論理学』ワークショップ	2011. 6	日本ヘーゲル学会第13回研究大会	ワークショップパネラー		
9. 『精神現象学』ワークショップ	2012. 6	日本ヘーゲル学会第15回研究大会	ワークショップコーディネーター		
10. ヘーゲルにおける知と超越	2012. 1	関西哲学会65回大会	ヘーゲル哲学において、知に対する超越が存在することを明らかにした。		
11. 他在における臨在—「現実」の存在構造	2013. 1	日本ヘーゲル学会第18回研究大会	ヘーゲル『論理の学』における概念知の構造を別括し、それが「本質論」においてどのように準備されているのかを解明し		
12. 海老澤善一『ヘーゲル論理学研究序説』合評会	2015. 1	日本ヘーゲル学会第22回研究大会	合評会特定質問者		
13. 牧野広義『ヘーゲル論理学と主体・矛盾・自由』合評会	2016. 1	日本ヘーゲル学会第24回研究大会	合評会特定質問者		
14. 嶺岸佑亮『ヘーゲル主体性の哲学』合評会	2019. 6	日本ヘーゲル学会第29回研究大会	合評会特定質問者		